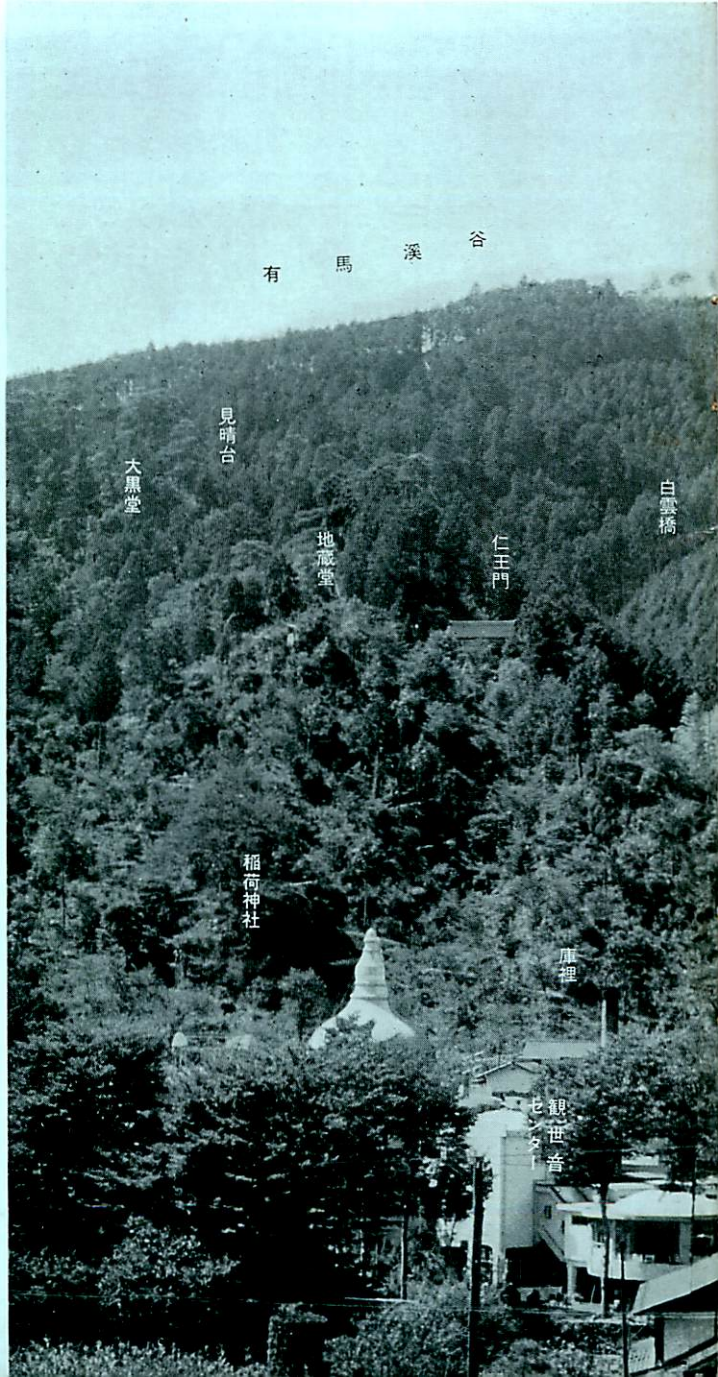


白雲山 鳥居觀音のしおり 11

昭和四十四年七月一日発行

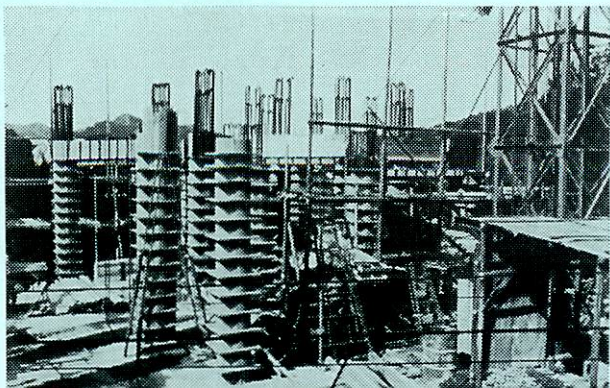


鳥居観音境内の面白岩台地に建立中の 大観音

基壇（高サ三十三尺建坪六十余坪）の屋上に聖観音
（高サ七十尺）脇侍仏二体（高サ四十尺）を建立



大観音脇侍仏 粘土原型
（実物大）



面白岩台地・基壇工事現場
（施工 三信工業株式会社）

印度附近の旅路 (其の一)

桐江

はしがき

私達夫妻は、世界仏教徒大会に、ビルマ(昭和二十九年)と、タイ(同四十一年)の二回にわたって参加の折、印度の仏跡巡拝をしたのですが、当時は交通、宿泊等不備の上日数も少なかつたので、インドの東北の一部の仏跡だけしか巡拝出来ませんでした。

処が昨年十月から、約一カ月間の印度附近視察の勧誘を受けました。そのスケジュールを見ますと、国内飛行機を二十数回も利用するので、早起きをする時が多く、殊に厳寒と極暑の急変の旅行で、私の様な老人は無理ではないかと心配しましたが、一行十七名の中に常連が多いのと、アフガニスタン附近やガンダーラ地区の名高い仏跡や、玄奘三蔵法師の足跡、其の他の有名な遺跡を見る事が出来るので参加したのです。

最近のカルカッタ

十月二十七日十時半、羽田を出発、時差五時間なので、午後七時にカルカッタの、前回と同じグラントホ

テルに着きました。

途中香港の空港で立派なヒゲを生やした印度人が、日本語で話しかけ、ブダガヤの宝篋印塔きょうとうを建てた時私も骨折ったが、今度は日本寺を建てる為日本に行った帰りだとのことで、日本の有名なお坊様の名をたくさん知っていました。

現在ブダガヤにはビルマ寺とチベット寺の二つありますが、各仏教国の寺院全部が仏教の大本山というべき积累成道の地、ブダガヤの塔を囲んで建ち並んだとしたら、定めし壯観であり、又仏教興隆のためにも、そうありたいものです。

カルカッタは以前よりきれいになりましたが、八百万の人口の中には道路で寝起きしている浮浪の民が、まだ二百万もいるとのことですが、常夏の国で金もいらずまったく呑気なものでしょう。併し自動車が多くなつた為か、道路にのさばっている牛は少なくなりましたが、相変らず拘摸かりや、乞食が多く、町を歩くとうるさくて気がゆるせません。同行者に万年筆などずられた人が二、三人もありました。

二十七日、カルカッタ見物をしましたので、その一部を書いてみます。

ジエーンテンブル(ジャイナ教)はあまり古くはな

いが、その設計は勿論、色彩や模様など印度には珍らしく細密で、実に美しく、御本尊も最高二十カラットもあるダイヤモンドの他の寶石が沢山ちりばめてありまして、あたかもお伽の国にさまよっている感じがいたしました。

カリイ寺（ジャイナ教）シバの神が御本尊ですが、極彩色の奇妙な彫刻や絵で埋めてあります。

又これでも寺院かと思われる様な全部鏡張りの、室に極彩色の沢山な神像や、神具が安置してあるのが、この鏡にうつりあって、無数の神像が四方八方に並んでいる様は誠に壯観なものです。

白虎、動物園に真白の虎がいるとのこと、わざわざ見に行きました。この白虎は印度でも一カ所しか住んでいないとのことですが、私達を見るとランランたる目で牙をむき出し、ウオーとほえ、今にも跳びかかるとするすさまじい様相は、白虎という先入観があるためか、折の中にあるとは知りながらも、一同ギョッとしたしました。

ダージリンの登山道

十月二十九日朝七時の飛行機で、カルカッタを出発し、二時間でベンガル平原の北端、バグドグラに着き

ました。

ここからダージリン迄の道は一カ月前、大暴風雨で崖が崩れて、開通しているかどうか、ここにくる迄、はつきりせず不安だったので。

しかし、ダージリンは印度の大切な観光地であり、又人口四万の町民の物資補給路なので、政府の突貫工事、一週間前にやっと自動車を通れる様になったとのことではっとしました。

此処は英国人が避暑地として開発したので、レールの幅六〇センチ位のオモチャの様、そして時折スイッチバックし乍ら、のろのろ上る登山鉄道もあります。土砂くずれで、当分復旧の見込みがたない位のみじめな有様です。

私達は五台の自動車で、この荒けずりの一方交通の多い山道を、三時間程登ったのですが、その間峨峨たる岩山、昼尚暗いジャングル、見晴らしのよい峰道、点在する茶畑等、実に変化の多い登山道です。

峰道から見ると、はるかに東バキスタンや、日本軍が二万も全滅したというインパールの方面まで、見渡す限りのジャングルの山岳地帯で、今尚野生の象の大群や、虎、犀等の猛獣が沢山いて、ハンターにとって、最も魅力ある処だそうです。

ダージリンの茶園

この地帯は印度第一のお茶の産地で、今から百数十年前、日本から茶の実を輸入して、蒔いたのが地質、風土が適していると見えて、至る処茶園です。そして下界では日本の茶葉の二倍もある大きさですが、だんだんのぼるにしたがい、日本の茶と同じ大ききさになりまして、一年に何回も茶摘みが出来るそうです。

ここで出来る紅茶は他国では味わえぬ、よい風味で、コーヒー好きの私も、印度では紅茶ばかりのんでいました。此の茶園には陽よけのために、大木が適当な距りに、並んで生い、その下に美人で名高いチエツカム娘が、山岳民族独特の服装に、ネッカチーフをかぶり、額から背中に袋や籠をさげて、大勢並んで茶摘みする様は南国の美しい油絵を見る様でした。

山岳の町ダージリン

ダージリンは、ヒマラヤ杉の茂った、二千百余米の山の上の段々町で、ネパール、ブータン、チベット、シッキム等の重要な物々交換都市であるため、人種も、建物も、服装も、山岳民族調ゆたかな香りがして、いかにも遠い異国に來た感を深めます。

此処のレプチャという人種の祖先は、日本人かともちがえる位、顔も体格も日本人に似ており、言葉も万葉語に近いのが、多いとのこと、愛そのよい親しみのある、山岳民族ですが、一面剽悍であるため多く軍人に採用されているとのこと。

ヒマラヤの遠望

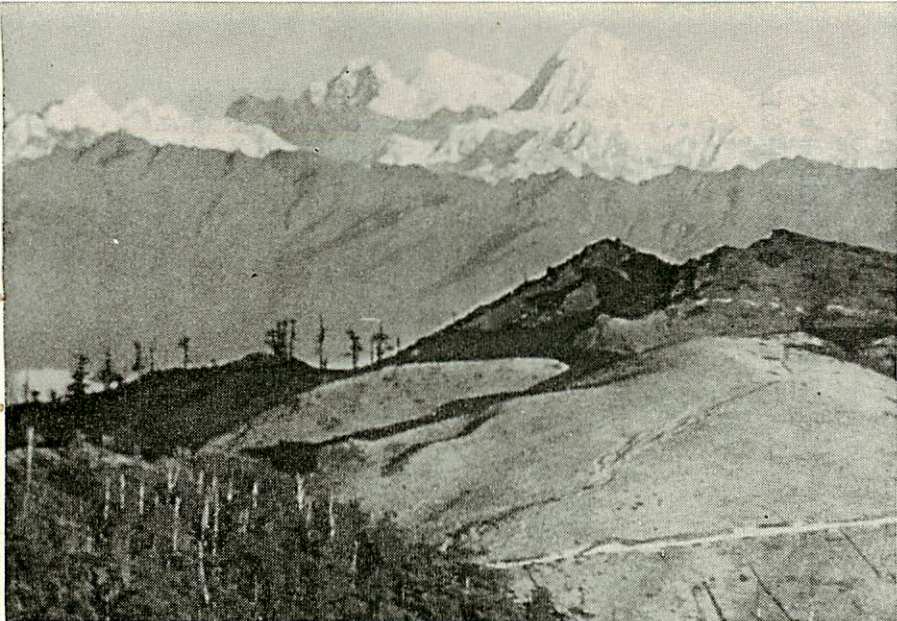
車から降りたら空気が稀薄な上に、防寒服装をしているため、エベレストホテル迄僅か数十段の石段を、あえぎあえぎ登りました。

併しホテルの部屋には暖炉に、薪が赤々と燃えていて、バルコニーからは、二千八百余キロという日本列島の、長さ位の、万年雪や、氷河におおわれた、ヒマラヤ連峰が見えて威圧されます。

正面には世界第三峰のカンチエンジュンガ（八五九七米）とはるか左には、世界最高峰のエベレスト（八八四八米）が見えます。

観世音菩薩が、住われたという、補陀落山とは、このヒマラヤのことです。

東方ナトラハス山は、お釈迦様が越えられた所であり、玄奘三蔵も訪ずられた等と、聞いていよいよ敬度の念が湧いて來ました。



む 望 峰 連 ヤ ラ マ ヒ 根 屋

町 見 物

午後町を見物に出かけた処、山桜や、菜の花が咲いているかと思うと、コスモス、菊、ポインセチア、紅葉の下の茶摘みなど、春秋ゴチャゴチャの不思議な景色を見ました。

英人ヒラリーと、シッキム人テンジンの二人が、エベレスト登頂に使用したという、数々の品物が、陳列されている記念館を見ました。

ヒンズー教は、太陽や、シバの神の住んでいると信じているヒマラヤを信仰の対象としているので、神の住んでいるエベレストに登る事を、なかなか許可してくれなかったが、頂上の神の座には、はいらぬという約束で、やっと許るされた位、神聖な山とされております。

エベレストが、いかに高いかということは、次の比較表でもわかります。

エベレスト(ヒマラヤ) 八八四八米

モンブラン(アルプス) 四八一〇米

富士山(日 本) 三七七六米

穂 高(北アルプス) 三一九〇米

日本の登山隊は、八千米台の一峰と七千米前後を十



ダージリンより世界の

五峰も征服していると、きかされて、日本の登山家が
残した偉大な記録に対して、敬服しました。

併しこの霊峰を見ると、誰もが登り度い魅力にから
れるのは不思議です。

町はずれに登山の練習をするという絶壁が、そそり
たっているのも如何にも、ヒマラヤの町らしいです。

ゲーム寺

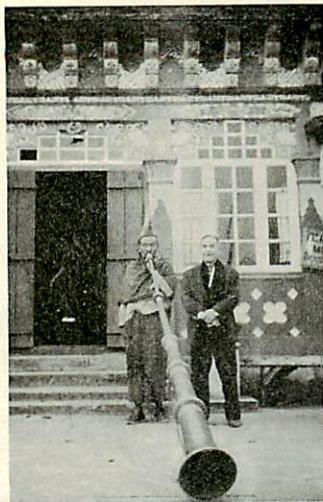
ヒマラヤ連山が一望に見える高台に、チベットの由
緒あるグーム寺(ラマ教)があります。小さな寺院で
すが、ゴテゴテと濃厚な彩色や、不思議な仏像、周囲
の棚に整然と並んでいる大蔵経等、チベットのふんい
きを、十分味わうことが出来ました。

そして毎朝夕檀だんの上に真鍮の油壺(茶呑茶碗位)百
八個に、点火して両側に八名ずつ十六名の僧が読経を
つづけること、千年以上に及ぶとのことで根強い信仰
心には感心しました。

そこにいた僧が私共のために盛装して、三米もある
長いラッパを吹いてみせてくれましたが、荘重な音色
に心を打たれて、これがほしくなりまして、とうとう
一個みやげに買って来ました。真鍮の細長いついで、
ラッパ型のものです。

十月三十日の朝四時に起こされて、ありったけの衣

ヒマラヤの御来光



ゲーム寺で見たラマ教の
ラッパの実演



ラッパを吹く編集者福地君

服を着込み、ハンター用の大きな懐爐を背負い込み、ホテルで貸してくれた毛布にくるまって、自動車にて出発、大分登ってから登山口の石門の処で、ジープにのりかえて、標高二千四百米のタイガーヒル展望台についたのは、五時前でまだ暗いのに、すでに百人以上が、窓辺やバルコニーを占領していました。

ここ

は、イ
スラム
教徒等
の大切
な巡礼
地だけ
あって
敬虔な
祈りを
している者もおります。

五時半頃次第に東の空の雲間が色づき始めると、此処から僅か七十五キロのカンチェンジュンガを始め、ヒマラヤの峰々がうつつすらと姿を現わし始めたので、一同固唾をのんで待っていると、だんだんと黄、赤、に変化してきて、やがて東の空に太陽が上ると、一瞬



タイガーヒルの登山口の門

万年氷河におおわれている山々が、茜色に燃えあがりその荘ごんな美しさに、人々はアッ、とばかりにどよめきます。私等も毛布をすてて合掌しましたが、これこそ、富士山等で見える御来光とはちがって、まだ見えぬ太陽の光りで徐々に変化してゆく、荘ごんな靈山を拝むのだから、何ともいえぬ神秘的なものがあります。



三階ベランダにてご来光を待つ桐江夫妻

又飛行機から見た百鬼乱舞する様な雲、切れ間から見えるベンガル平原、曲りくねって流れるガンジス河、この対照は実に雄大でした。

六時頃この感

激をあとに、飛行機の座席の關係上、一行の半数が下山して、飛行場で朝食をしました。

この時の紅茶は実にうまかったので、今だに忘れられません。

ヒマラヤ出現の歴史

ペナレスに大理石で彫った、十米四方位の美しい全印度の地図だけが展示してある寺があります。これで見ると、ヒマラヤ山脈は、平坦な印度の北辺に、屏風のように聳えており、地球の屋根というだけのことはあると思えました。大昔は印度と、チベットの間は海であったのが、大高原のチベットから、非常に大きな力が南下してきて、堅い地殻の印度にはばまれて、盛り上がり、次第に隆起して、二千五百キロの長い世界の屋根といわれる程の、大山脈が出来上がったのと、六千米の高地から、大昔の海の生物の化石が、発見されるのは、その証拠だとのことです。

それが今尚生育中で年々七・五センチ位ずつ高くなっているとのこと、秩父が昔海底だったことを考えると、作り話ではなさそうです。

印度の宗教

印度の宗教は複雑且つ神秘的で、これから書く、印度の寺院や、彫刻等何宗かをあらかじめ知っていた方がよいと思ひまして、甚だ堅苦しいのですが、その概要の一端を書きます。

印度の宗教は複雑ですがこれを大別しますと左の表のようになります。

ヒンズ教(六千年の古い歴史をもつバラモン) 印度全人口の九五%

仏教(二千五百年前より) 同 一%

ジャイナ教(同 右) 同 〇・五%

回教・キリスト教其他 同 三・五%

ヒンズー教

バラモン教は天地の大自然現象を神としておりまして、実に多くの神話があり、これを代々口伝されていたのを文字が出来た時「ヴェーダ」(智慧の教書)という、キリストのバイブルに匹敵する教書が、出来て之を信仰の柱としているので開祖というものはありません。其の神話の一つを紹介しましょう。

『ある王様が馬のお祭りをしていたところ、大切な駿馬が盗まれたので、其の王子が之をさがす旅に出かけたところ、カスピ仙人の怒りにふれて、王子は灰にされてしまった。王はこれを歎き悲しんでいたところ、「もし王子の罪を滅して天界に再生させたいのなら天上を流れているガンジス河の水をつかえ」と神のお告げがあったので、王様はこの河をさがすべく苦難の旅に出かけたが、この河をさがし出すことが出来ず、遂に曾孫迄四代にわたり、この河を探し求めるため激しい苦難の旅を連続して、苦業を積んだので、神も遂に

その願いをかなえてやることになった。

然しこのガンジス河は非常に重くて、大地がこれをささえることが出来ぬので、シバの神にお願いして、これをささえていただき、地上に流れるようになり、曾孫はこの水を持って帰り、灰になった王子に注いで、天上に再生せしめることが出来た。

多くの神々もこの不思議な光景を眺めて、心身を清めようと、この流れを追っておよがれた。』というこの奇想天外な神話を信じて、今でもガンジス河畔のペナレスには、一生に一度以上必ず巡礼して、この河で沐浴しなければ天国に行けないということから、信者は必ずこれを実行しているという狂信ぶりです。

又所々の寺院、王宮等にこのガンジス河の聖水を入れる大きな美しい瓶(かめ)があるのを見ました。

それから神を生んだという聖なる牛の大きな石彫に水をかけて、お祈りしている姿もよく見うけられます。

このバラモン僧がつくったカースト制という四階級が、今も人々に何等不平もなく厳守されています。

四階級とはバラモン(僧侶)クシャトリヤ(武士、王侯)ヴァイシャ(商人、庶民)シュードラ(奴僕)ですが、その下に乞食のような、放浪民が沢山います。そのため一つ用を頼むにも数人の手をわずらわすと

いう、非能率的な面があります。

そのため印度の法律はこのカースト制を禁止しているし、学校もこの区別なく、共学していますが、根強い信仰を排除することができないそうです。

このカースト制や、世界一沢山いる蛋白源の牛を食わぬ等、ヒンズー教の狂信が印度の発展をはばんでいることがうかがわれます。

併し印度には、二百余もの種族があつて、言語も違つてゐるし又人種ごとに相反目してゐるのを、何とか團結させて人口五億余の世界第二の大国として、国際連合でもあのような大きな発言権をもつのも、このヒンズー教の狂信のお蔭です。

バラモン教の流れをくむこのヒンズー教は、下層、大衆に親しまれるような教義で、二百もある印度の種族にも、とけ込むように指導したので、根強い信者を獲得して、実にインド人口の九五%をしめる迄になりました。

又神々は沢山あるが神そのものの真理は一つだし、宗教も沢山あるが、根本は同じだというように、幅広いもので、他宗教も是認する寛容性がありますから、侵略的な回教徒も如何ともすることが出来なかつたのです。

教義の主眼は、何度も生れ変わつて善行を積み重ねれば、遂に神に近づけるといふことを深く信じてゐるため、死ぬことを恐れなくなるとのことです。

又寺院にはバラモンの多くの神話により、実に多くの神々の像が造られ、種族の性格に合うように沢山の神様が造られてゐます。そして寺院には神話に基づく無数の絵画や彫刻があります。

ヒンズー教の宗派は大きく分けて、三派となつておられます。ヴィシュヌ(護持神)シバ(破壊神)ドウルガ(シバの妻で性の神)の三派です。シバの神は男女両性で、右側の胸は男性的で、左側の胸には大きな乳房があります。そして愛情深くシバの神の妻ドウルガと共に生殖の神として信仰されて、男女融合の歡喜こそ神と合一するものであり、世界創造と宗教的救済とを表すものだとして、人心をとらえており、その信仰は根強いものがあります。

ヒンズー教寺院の、御本尊はリンガ(陽根)をまつており、絵画、彫刻は男女の組合せで、露骨な性のないとなみが、多く見られます。

仏教

釈尊は始めバラモン教の苦行をされたが、悟りに効

果がないことを知り、フダガヤのボダイ樹の元で、瞑想に入られて、おさとりを開かれたのが、二千五百年前です。

バラモン教の神には、梵天、帝釈天、馬頭等が沢山取り入れられています。殊に降三世明王は、ヒンズー教で最も信仰されていて、偉大な神通力を持つ、シバの神夫妻をジャキの如く足下におさえており、ヒンズー教徒が見たら定めし怒るだろうと思われるようなものもあります。

仏教は千三百年の間栄えたのですが、四民平等を教義としておることがバラモンの根強い因習に抗し難く、又回教徒や、モンゴールの進入により破壊されて、遂に信者は国民の1%という衰頹ぶりです。

しかし印度政府の保護と世界仏教国の刺激により漸次興隆の兆が見えて来ておることは、仏教界のためにもよろこぶべきことです。

ジャイナ教

仏教と同時代に生れたのですが、仏教と同じく不殺生、不偷盗、不邪淫、不妄語及び不所得等の戒を守り、極端な禁欲、苦行をしております。たとえば虫が口にとび込むを防ぐため、常にマスクをしており、又払

子のような箒をもって、虫を踏みつぶさぬよう掃き掃き歩くという位です。

回教

印度の西北では、タジマールを始め、沢山の回教寺院や、ヒンズー教と、回教の混合した寺院建築も多く見られます。特にパキスタン地区は回教徒が多いので、印度から二十年前独立を宣言したのですが、私共が十五年前印度を旅行した時、デリーで東パキスタンから沢山のあわれな、ヒンズー教徒の避難民を見て、驚いたことがあります。

回教徒が他宗教徒を汽車にのせ、その入口をふさぎ、これを銃げきして印度に送ったので、印度側でも、これと同じ報復手段をした等、血なまぐさい宗教闘争が、くり返された時代もありまして、今でも北方カンミール方面の境界が定まらず、戦闘状態はつづいておるとのことです。

今度の旅行でも、カイバル峠を越えてみたいという計画で、パキスタンの北辺のベンジャワールに行ったのですが、直接パキスタン入りは出来ず、先ずアフガニスタンに飛行機で行き、そこで飛行機をのり替えて、パキスタンに入国するという戦時状態でした。

シーク教

印度西北部に住する、シーク族が中心で、六百万の信徒をもつ宗教で、ヒンズー教のカーストの制度を廃し、四民平等を実行していることは、仏教に似ております。

ベナレスのホテルにシーク人の案内係がいましたが、堂々たる体格でひげをのばして、大きなターバンを頭に巻き、金モールで飾った赤い服を着ていて、威圧されました。

シーク族はこの様な立派な体格を持っている上に勇敢で、ヒンズー教や、回教にも屈服せず、又ギリシャのアレキサンダー王や、ベルシャ軍、アフガニスタン軍が、印度に侵入する度、これを迎撃して、外敵をせんめつした歴史をもち、印度では最も尊敬されている人種で、今でも印度軍隊の中核をなしているそうです。

拝火教

イラク、ペルシャに拝火教の山が聳えていることを、以前かきましたが、千余年前、回教徒に圧迫されて、一部の信者が印度のボンベイに住みついたもので、現在信者が十万人位とのことでした。

拝火教は字の如く火を太陽と共に信仰の対象としており、室内では火をたやさない位です。そして人間は鳥獸を食うので、死後は鳥の餌食とします、そうすることによって、火も、土も汚さずにすむという考えから死ぬと鳥葬にします。

ボンベイ市内見物の時海岸近くの森に覆われた、高い丘の上に白い建物の屋根が少し見えて、禿鷹（コンドル）がその上を乱舞していました。

信者が死ぬと、この森の中の石油タンクの様な塔の中に入れ、葬儀がすんで会葬者が外に出ると、待つてましたとばかり、禿鷹は先ず死人の目を狙うが、最初に右の目をつつくと、死人の霊は祖国イランの天国に行けると信じ、これを番人が遺族に報告することです。そして数分後には骨ばかりとなり、自然に穴の中におち、地下水道を通じて、海に流れるということになります。

このように印度の宗教は、複雑多岐ですが、ヒンズー教が国民の九五%を占めており、信仰にあげられておりますので、国民の大部分は、まだ文盲で、非科学的、低開発国です。

けれども宗教による、高度な精神面の文化をもっている大国であると、自負している不思議な国民です。

西遊記（其ノ六）

悟空はふと本陣の猿どもがあわをくって逃げ出すのが目にはいったので、中心いささかあわて、法相を収めて棒を引っこめるや、パッと逃げ出した。真君追いますがつて、

「おっとどこへ行く、早々に降参すれば命だけは助けてやる！」

とどなる。悟空はもはや戦意なく、ひたすら逃げて洞の入口まで来ると、康、張、姚、李の四太尉と郭申、直健の二将がまぢかまえていて、いっせいに。

「悪猿、どこへ逃げる！」

と立ちはだかる。悟空、うろたえ、金箍棒をひねって縫針とし耳の中にかくすと、身をゆすって一羽の雀となり、樹のこずえにとんで、じつとすくんだ。

かの六兄弟、てんでにあたりを探したが見つからない。そこで、声を揃えて叫んだ。

「化け猿が逃げたぞ……」

わいわいいつているところへ真君がかけつけた。

「おのおの方、どこで逃げられました」

「ここで取り囲んだと思つたら、とたんにいなくなっちゃいました」

真君が目を皿にして見廻すと、悟空は雀になって樹にとまっている。真君は、法相を収めると、神縫をすてはじきをおろした。そして身をひとゆすりして一羽のうえた鷹に変わると、もろ羽をひろげて飛び立つや、雀めがけてバサと打ちかかった。

悟空はそれと見て、サッと飛びあがり、大きな鶴となつて空のかなたへとんで行く。

真君はいそぎ羽をふるわせて身をゆすり一羽の大海鶴となつて、大空を真一文字に追っかけ、くわえようとする。

悟空はまた空から舞いおり、谷間にもぐると、魚にばけて水の底にひそんだ。

真君は川のほとりまで追つて来たが悟空の姿が見えない。心中ひそかに考えるよう、

——猿め、水中にもぐつたに相違ない。さだめし魚かえびにでもばけていることだらう。

さらば、こちらも何かに化けて捕えてやるう。

そこで真君は、魚鷹となつて下手の水面に浮かび様子をうかがっている。魚にばけた悟空は、流れのままに泳いでいたが、ふと一羽の鳥に気づいた。くろさぎとも見えるが、それにしては毛が黒くない。しらさぎだとすると頭にくびげがない、こうのとりにかと思れば

脚が赤くない。こいつ二郎の化けたやつで、おれを待ちぶせているに相違ないとさとした悟空は、くるりと向きをかえると、渦あとを残して逃げ出した。

真君、見とがめて、

——いま渦を巻いて逃げたやつ、鯉にしては尾が赤くないし、けつ魚にしてはうるこに紋がない、黒魚かと思えばかしらに星がない、おしきうお魴魚にしてはあざと鰓に針がない。やつ、わしを見るや、どうしてすぐ逃げ出すんだらう、これはてっきり猿めの化けたやつだわい。

そこで、追っかけて、ツといばもうとすると、悟空は水面にとびあがり、一匹の水蛇となつて岸に泳ぎつき、草の中にもぐりこんだ。

魚をくわえそこねた真君、水音といっしょに一匹の蛇がとび出したのを見て、かやつ、てつきり悟空と、いそいで身をひるがえし、また丹頂づるとなり、長いくちばし——先の尖つた鉄の鉗子のような——を伸ばしてくわえようとした。

水蛇はビラリとはねて、一羽の花鶉はなうとなり、みぎわにキョトンと立った。真君は、その化け方がいかにもいやしいのを見て——花鶉というのは、鳥の中でもっともいやしくみだらなやつで、相手かまわず交合する——そばによる気がしない。そこで本相を現わす

と、歩いて行って弾弓をとりあげ、いっばいに引きしぼってピシと一ぱつ。花鶉はよたよたとよろける。

花鶉の悟空、はずみを利用してがけをころげおち、そこにかくれてまたひと化け、今度は土地神のほこらになりすました。口を大きくあけてほこらの門に似せ、歯は門の扉に、舌は菩薩の像とし、眼は格子窓としたが、しっぽばかりは始末にこまり、うしろにピンと立てて一本の旗ざおとした。真君は、がけ下まで追つて来たが、打ち倒した花鶉は見当らず、そこにはちっぽけなほこらが立っている。真君は笑つた。

「こいつ猿めだわい。かやつ、またここでわしをだますつもりらしい。ほこらは、だいぶ見たがうしろに旗ざおの立っているのは見たことがない。これはてつきりあの畜生のからくりだ。

かやつ、わしを中におびきよせ、一口にガブリとやる魂胆らしいが、その手はくわぬぞ。まてまて、げんこでまず窓をたたき破り、あとで扉をけとばしてやるから」

悟空は聞いて心中おどろいた。

——こいつはまずい。そんなことされてはたまつたものではない。

かれは、パツととびあがると、ふたたび空中に消え

てしまった。真君があちこちさがしまわっているところへ、四太尉、二將軍がうちそろってやってきた。

「兄者、大聖はつかまりましたか」

真君笑いながら、

「あの猿め、さっき、ほこらに化けてわしをだまそうとしたのだが、おそれをなしてパッと跳びあがったまま、行方しれずさ」

みんなおどろいて四方を見廻したが影も形も見えない。

「おのおの方、ここで見張りと警戒をたのみます。拙者は上をさがして来ますから」

真君は、いそぎ身をおどらせて空中にとびあがる。そこには、かの李天王が照妖鏡を高くかかげて、哪咤太子とともに雲端に立っている。真君、

「李天王、猿めを見かけませんでしたか」

「上つては来ませんでしたよ。わたしは、ずっとやつを照らしていましたかね」

真君は変化を競い、神通を弄し、群猿を捕獲したことをすっかり話し、

「かやつはほこらげに化けましたので、打ちこわしてやろうと思つたら、逃げられてしまったのです」

と結んだ。李天王は、それをきくと、また照妖鏡を

とり直し、四方を照らしていたが、わっはっはっと大笑いしていった。

「真君、はやく、はやく、かの猿め、隠身の術を使って罅みをぬけ出し、あなたの灌江口へ行ってますよ」

きくや真君は神鋒をおっとり、灌江口さして後を追った。

悟空は早くも灌江口になると、二郎真君になりすまし、雲を下げほこらの中にはいつて行った。門番の鐘馗は、それと気づかず、叩頭して迎える。かれは部屋の中の腰をおろし供え物を調べはじめた。

李虎が願ほどきに供えた三牲（牛、羊、豚）、

張竜が願がけに供えた盛物、趙甲の子さすけの願文、錢丙の病氣本復の願がけ——

とその最中に、もうひとりのご主人様が帰って見えましたが、と知らせるものがある。鐘馗たちはあわてて出むかえたが、みなびっくり仰天。真君

「齊天大聖とか名のるやつが、今ここへきただらう」「大聖という人は見えますませんが、もうひとりのご主人様が奥でお供え物を調べておいでです」

真君、ずかずかと門をはいって行くと、悟空は本相を現わし、

「真君、まあお静かに。このほこらはもうわしのもんだよ」

という。真君は三尖両刃の神鋒をふりかぶると、まっこうから切りさげた。悟空は身をひねって神鋒をやりすぐすと、かの縫針を引き出し、ひとふりふたふり、腕ほどの太さとし、一足ふみこんでまともに相手を迎えうつ。ふたりは、わめきさげび廟門から打って出で、時に雲を起こし時にきりをとばせ、渡りあいつつ行くほどに、またまた花果山にきてしまった。

おどろいた四天王ら、いよいよ守りをかため、一方康、張太尉らは真君を迎えて、協力一致、悟空をとり囲んだ。

さてかの大力鬼王は、真君と梅山の六兄弟が、出動の命を奉じ、兵をひっさげて妖魔征伐に出むくのを見とどけると、天上に帰って復奏した。

玉帝は観音菩薩や王母、もろもろの仙卿たちと靈霄宝殿で話に花を咲かせていたが、

「二郎が出陣したというのに、この一日、いっこうに知らせがないようだ」

ときりだした。観音菩薩が合掌している。

「わたくし、南天門の外まで陛下と老君のおともをしますから、親しく様子をごらんになってはいかがで

しょう」

「それもよからう」

と玉帝は、即刻のりものをととのえ、一同とともに南天門に出御、門を開いて眺望する。

見れば、あまたの天兵が天羅地網を張りめぐらして四面をとり囲み、李天王と哪吒太子は照妖鏡をささげて空中に立っている。真君は、大聖を中にひっ包んで奮戦のまっ最中。菩薩は老君にいった。

「わたくしの推挙した二郎真君はどうです。案の定、神通をふるって大聖を押し包みましたもののまだ捕えることができません。今ちょっと、加勢して、あれをとり押えさせてやりましょう」

老君

「何を使って助勢するのです」

「わたくしの浄瓶と揚柳を投下してあの猿の頭に打ち当てるのです。打ち殺すことはできませんが、ひっくり返すことはできるでしょう」そしたら真君もと押しやすといふものなのです」

「あなたのその瓶は、焼物ですから、うまく当ればよいが、もし頭に当たらず、やつ鉄棒にでも当たったら、粉みじんでしょう……」

「あなたは、何かえものをおもちですか」

「有りますとも」

老君は衣の袖をまくり、左腕から一つの輪をはずして、

「このえものは、あかがねを打ってきたえたものですが、拙者が使えば全体に靈氣が通じ、何にでも変わることができます。これを投げて、かやつに打ち当ててやりましょう」

いい終るや老君は、南天門から下に向かって、それを投げ落した。輪はブルンブルンと花果山の兵營におちて行き、ねらいたがわず悟空の頭に当たった。悟空は、七兄弟と苦戦のまっ最中、天上からそんなものが落ちようとは知らず、脳天を打たれてふらふらとなり、ぱったり地面にのめった。はい起きてにげようとするところを二郎真君の犬が追いつがり、ふくらはぎにガブとかみついたので、またぱったり……。

そこを真君と六兄弟が繩でしばりあげたうえ、さこつをかぎ刀でつらぬいて、二度と変化の術を使えぬようにしてしまった。

老君はそこで、玉帝はじめ観音菩薩、西王母、諸仙をうながして、靈霄殿に帰って行く。

一方、下界の四大天王と李天王の諸神将は、兵を収め、とりでを撤し、真君の前にやって来て、口口に、

「お手柄、お手柄」

とお祝いをのべる。真君

「これは天尊の大徳と、みなさんのお力によるもので、拙者なぞなんの手柄もありません」

とけんそんする。四太尉は、

「兄者、こいつを引っぱって行って玉帝のおめにかきましょう」

真君

「そなたたち、まだ天禄をうけていないから玉帝に拜えつはできない、神兵に護送させ、わたしは李天王らと天上に行って復命するから、そなたたち山じゅうの者どもを掃蕩してもらいたい、終り次第灌江口に帰ってくれ」

そこで真君は、諸神将と共に雲にのり、勝どきをおげつつ天界にむかった。

そして四天王ら、妖猿斧天大聖を捕ばくして参内し報告すると、玉帝は、すぐさま大力鬼王と天丁とに命じて悟空を斬妖台に引出し、八裂きの刑に処することになった。

妖力 悟空

さて悟空は、多くの天兵たちによって斬妖台に引き出され、降妖柱にくくりつけられて、いよいよ処刑と

なつたが、かれのからだは、刀もおのも槍も剣も、ま
ったく刃が立たない。南斗星はごうをにやし、火部の
諸神に命じて、火をつけて焼こうとしたが、それもだ
め、そこで雷部の諸神に雷くずを打ちこませたが、こ
れまた毛すじ一本傷つけることができない。大力鬼王
は、諸神とともに、

「陛下、かの大聖というやつ、かかる護神の法をど
こで学びましたか、いかなる方法をもつてもびくとも
しません。いかがいたしましょう」

玉帝はこれをきいて、

「かやつ、そのような妖力をもつか。さていかが処
断したものであるう」

と思案のてい。すると太上老君、

「かの猿めは、蟠桃をくらい、御酒をのみ、その上
仙丹をも盗み出しました。拙者が五つのつぼにつめて
おきました丹は、すでにねりあがったものも、半ねり
のものもありましたが、すべてかやつ、の肚の中にはい
ってしまつたのです。そこで三昧火が作用し、ひとつ
にねりあげられましたので、金鉄のからだとなつてし
まつたので、ちょっとやさつとでは傷つけることはで
きません。ここは拙老におあずけいただき、八卦炉の
中に放りこみ、文武の火をもつて鍛錬いたすのが一番

よいでしょう。わたしの丹がねりあがる頃には、やつ
もおのずと灰になってしましますよ」

玉帝はきいて即座に六甲六丁に命じ、悟空を解い
て、老君に託される。

一方玉帝は、二郎真君に金花百朶、御酒百瓶、九還
丹百粒、さらには珍宝、明珠、錦などの品々を賜わ
り、義兄弟にもわかつようにとのおことば、真君お礼
を言上、灌江口に帰つて行つた。

さて老君は宮に帰ると、悟空のなわをとぎ、さ骨を
つき通つた勾力を引きぬくと、八卦炉の中に押しこみ、
道人にいいつけて火にかけ鍛錬させた。もともとこの
炉は、乾、坎、艮、震、巽、離、坤、兌の八卦からで
きている。そこで悟空は、す早く巽宮の位置にもぐり
こんだ。巽はすなわち風である。風があれば火はこぬ
道理、だが烟にはなやまされ、両の眼は、ただれては
やり眼のようになってしまつた。「あかめ」といわれ
るようになったのは、そのためである。

光陰は矢のごとく、四十九日がすぎて、老君の仙丹
はようやく熟してきた。

ある日、炉を開いて仙丹をとり出すことになつた。
悟空は炉の中で両手をおさえ、流れる涙をこすつて
いたが、上方で音がする。

つづく

玉華門の落慶式を終えて 寺務局

四月十七日、白雲山鳥居観音では、三蔵塔への登山道入口から約百米の地に、玉華門（支那門）が完成したので、春の例大祭日を卜して、落慶式を執行しました。



四月十七日落慶を迎えた玉華門

前日の雨は夜に入って静かになったので、誰もが明日の天気は、大丈夫とと思っていました。

ところがどうしたことでしょう……。

夜半から雨は雪にかわって、朝までには十五センチもの積雪で、名栗谷は一面の銀世界、しかも雪はまだ降りしきっていました。

この分では今日の落慶式はどうなることだろうと、関係者一同心配している処へ、東京江古田の平沼先生から電話で、「今日の落慶式は古今稀な春雪の中で決行」とのお話で、態度は決定しました。

当日ご参拝の予定であった、二、三の講中からは雪のため、おとり止めになるとの、ご連絡もいただきました。

気象台始まって以来の、珍らしい春雪に、山の木々はその重さに耐えかねて、倒れたり、幹の途中から折れたり、弓のように、曲っているのもありました。

中でも境内の山ざくらが数日で満開になろうというところで、その太い枝が無惨にもへし折られ、今を盛りと咲いていたむらさきつつじも、折れたり、ねじ曲ったり、ねかされていました。

仏教の神力品に、「稀有のことを現じ給ふ」とありますのが思い出されます。

午前十一時、雪の玉華門に来賓並に関係者一同参列

一、除幕テープに缺入れが蛇の目シン工業株式会

社高木副社長、開祖平沼弥太郎の両氏により執行

二、点 眼 導師 別所竜城老師(九州別府)

三、般若心経

四、普 回 向

これについて本堂に於ての法要

一、拈香法語

一、三 拜

一、普門品偈

一、献華献香

一、回 向

一、三 拜

一、三蔵塔供養

一、和讃奉詠と舞の奉納

一、別所竜城老師の法話 十二時半終了。

かくしておごそかに、式典も終了しました。

中食会場庫裡の広間では多数の来賓ご参列のもと

で、当山にご協力を賜った、蛇の目シン工業株式会

社を始め、松井建設株式会社、並に設計技師今津政雄、

監とく服部雄次の両氏に感謝状贈呈があつて、中食に

入り、雪と花を眺めながら、しばらく和やかな時が、

ながれました。

今日の式典に際して篤信と申しましようか、仏縁と

申しましようか、降雪悪路を浸して、しかも公私共に

ご多忙の中ご参列賜りました方々を偲ぶ時、深い感謝

の念でいっぱいでした。

玉華門の落慶式、春季特別法要を通じて、いよいよ

皆様方と深く結ばれ、今後益々観音の利益が皆様の上

にもたらされますことをお祈りして、御礼にかえさせ

ていただきます。

合 掌

流灯法要のご案内

鳥居観音寺務局

例年の通り、鳥居観音流灯法要を左記により執

行いたします。四方有縁の方々、この法要にご参

加くださる、ご関係あるそれぞれのみ霊の供養

をなさってください。そして流灯法要を、夕涼み

がてら、一人でも多くの方々にごらんいただきま

すようお願いいたします。

記

一、流灯法要会 八月十六日

午後三時より本堂にて法要会

同 七時よりセンター下の川に流灯

一、申し込み 七月初めより受付八月十三日

まで

- 一、流灯法要料 一灯につき 一金参百円
- 一、何々家先祖代々又は戒名、施主の住所、氏名記入

寺務所に見本がありますので、ごらんください。

納涼花火大会

恒例により、納涼花火大会を開催します。

流灯会が終了して、観世音センター下の川原から打ち上げます。

- 一、日 時 八月十六日午後八時から九時三十分まで

- 一、見物場所 観世音センター前広場
- 一、打上花火 早打、仕掛、外多数打ち上

盆踊り大会

- 一、日 時 八月十六日午後八時から九時三十分まで

- 一、場 所 観世音センター前広場
- 一、盆踊り大会 参加者 婦人会、レククラブ、青年団、一般、飛入り歓迎

夏の白雲山と名栗川

本堂に入って、七観音の前に佇むと、清涼な空気が堂内に流れて、額の汗がすうっと冷えてきます。

静かに座して合掌すると、菩薩は参拝の人々に、やさしい面ざしで何か話しかけられるかと思われて、い

つまでもお顔をながめていたくなります。

白雲山の木立ちはどこへ行っても、よい木かげをつくって参拝して登山する人々に、いこいの場となっています。

園の奥、白雲橋のほとりに、流れている水は、きれいでつめたく、その味は格別です。

木の間を吹く風も、清浄で、その香りも味も何ともいえないものがあって、白雲山の夏は別天地です。

鳥居観音の下の名栗川には観世音センターが、夏をたのしむ人々のために、川をせきとめて作った、広くて、安全な天然のプールがあります。

夏休みになると、家族連や、町内会、子供会の団体が、センターに入場して、それから水着にとりかえて、このプールでたのしく泳ぐ様は美事です。

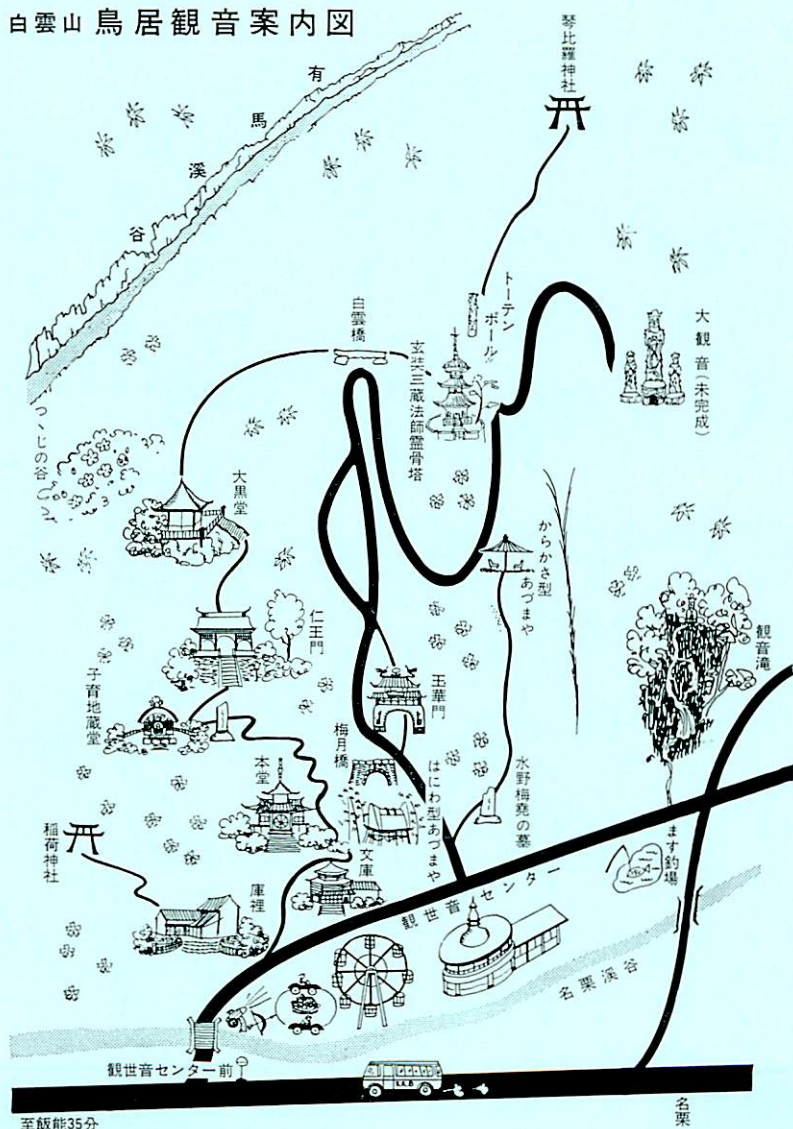
又川瀬のどこからか、きれいな河鹿の声がきかれるのもたのしいものです。

鳥居観音のしおり 第十一号

発行日 昭和四十四年七月一日 毎号定価貳拾円
 編集兼 埼玉県入間郡名栗村鳥居観音 岡部千三
 発行人 浦和市 武州印刷株式会社
 印刷所 鳥居観音
 発行所 鳥居観音

電話 〇四二九七〇四一五番

白雲山鳥居観音案内図



秋葉山

大観音（建立中）

→
観音滝

琴比羅神社

三蔵塔

蛇の目傘四阿

五華門

猿槍型四阿

梅晚之墓

梅月橋

本堂

鳥居文庫